日本の酪農の持続的な発展を夢見て

新潟大学 農学部 農業生産科学科　4年　栗村 美帆

「飼料自給率を高めることで、環境や農業経営等、全ての面で持続可能な酪農を実現すること」それが私の夢である。

私は幼い頃から動物が好きだ。私はサラリーマンの家庭で育ち、牛を見たり触れたりする機会はほとんどなく、高校生までの夢は愛玩動物を専門とする獣医師であった。高校生になって、進路の選択をする中で、人間の命は、動物の命の上に成り立っている、ということを認識するようになり、愛玩動物ではなく産業動物に関わる仕事に就きたいと考えるようになった。畜産の中でも特に酪農に興味をもった。牛が草地に放たれて草を食んでいる光景から、牛の命を介して人間が自然の循環のなかに組込まれている姿が想像できたからだ。高校２年生の時に千葉県の酪農家を見学した。そこでは飼料価格の高騰で経営が逼迫している現状を目にした。また、酪農学園大学の学校説明会では、酪農には環境に負荷をかけるという一面があると聞いた。調べてみると、日本の飼料自給率は２５％（2010年）と非常に低かった。世界では全人口を養うために必要な量の約２倍量の穀物が生産されているが、生産された穀物の５分の２を全人口の５分の1の人々が利用しており、その結果、穀物の分配に偏りが生じ、約９億５千万人の人々が飢餓状態にある。日本は世界の全流通量の９％の穀物を輸入しており、その４０％以上が家畜の飼料になるという。豪州の大干ばつや米国のバイオエタノール政策により、投機マネーが穀物市場に流入した2008年には、2006年と比較して飼料価格が40％以上上昇したことから、日本国内の酪農家の所得は半減したそうだ。日本においては、家畜から排出される糞尿の量は、国土に還元可能な許容量を上回っており、河川や湖沼の富栄養化や窒素の循環の不均衡による自然生態系への影響、硝酸態窒素による地下水汚染といった問題も生じている。このように、輸入飼料に依存した日本の酪農は、必ずしも持続的とはいえず、いつか破たんするのではないかと不安になった。そこで私は、日本の酪農が持続的に発展していく道を模索するために、新潟大学農学部農業生産科学科に進学した。

私は大学に入学した当初、「持続的な酪農」を環境という観点から捉えていた。牛が牧草や藁といった飼料を食べて乳を出し、その糞尿は堆肥となって、土壌に還元され、再びそこで飼料が育つ…という資源循環型酪農が確立すれば、酪農の持続性の問題は解決するはずだと思っていた。大学2年の時に資源循環型酪農を追求した北海道のS牧場に2週間滞在し、山地酪農を体験させていただいた。Sさんのお話を伺いながら、自然の営みを考慮しつつ、蜂に刺されたり、牛の食べ残した草を刈り取ったり、牛を追って

山を上り下りしたり、野生のキノコを採って食べたり、山の上から町の夜景を見降ろしたりして過ごした２週間で、人間が生態系という自然の循環の中で生きるためには、自然と共に生きようとする人間としての固い意志と、自然に対する積極的かつ謙虚な働きかけが必要であると感じた。大学の３年間では、講義や実習を通して、畜産を経済的、科学的な側面からも捉えることができるようになった。それまでは、科学技術による効率化によって経済性を追求する形で発展してきた、一見工業的な酪農に疑問を抱いていた。しかし、酪農を含め、農業はあくまでも産業であって、現代の社会では経済性や効率は無視できない。日本人の平均寿命は平成17年には82歳になった。戦後の日本の平均寿命の伸びは動物性タンパク質の摂取量の増加も一つの要因といわれ、効率化で大量の牛乳が生産されるようになったことも重要な役割を果たしているだろう。また、乳製品が安価に供給されるようになり、私たちは多様化した食を楽しむことができる。近所のスーパーでも、乳製品を材料とした食品は驚くほど多い。大学での学習で、資源には天然資源だけではなく、経済資源など様々な側面があることを知った。これからの日本の酪農に必要なのは、天然資源や環境の側面以外にも酪農に関わる各分野が正の循環を成し、持続可能であることなのだ、と考えるようになった。

大学４年生の現在は、「新潟県における自給粗飼料生産基盤確立の条件と自給粗飼料を給与される牛群の評価」というテーマで卒業研究に取り組んでいる。大学生活を通して、持続的な酪農に対して様々な見方ができるようになったが、飼料自給率を向上させることが、日本の酪農の問題を解決する糸口となり得るのではないかという思いは変わっていない。日本政府も、飼料自給率の向上を食料自給率向上のための集中重点事項の一つに位置付けている。近年、飼料生産への労働力の不足を補完するため、飼料生産組織やコントラクターによる飼料生産作業の効率化・低コスト化が促進されている。国の助成制度等の効果もあり、全国のコントラクター数は平成１２年の１８０組織から平成２０年には５２２組織に増加している。しかし、私が学んでいる北陸地域は、組織数１１、受託面積７０haとコントラクターが極めて少ない。そんな現状で、２０１１年に新潟県内で５戸の酪農家が粗飼料生産組合を設立し、経営を向上させたことを知った。この組合では、飼料用トウモロコシと飼料用イネを共同で栽培、調整することで、粗飼料を安価に調達し、自給粗飼料の給与率の増加と同時に乳飼比が8%低減し、経産牛1頭当たりの所得が向上したということであった。そこで、この粗飼料生産組合を事例として取り上げ、新潟県における、酪農の粗飼料生産基盤を確立するために必要な諸条件を明らかにすることと、自給粗飼料の利用拡大につなげるため、生産された粗飼料の品質、飼養される乳牛の生産性および繁殖性を総合的に評価し、自給粗飼料を利用した乳牛の飼養管理の状況を明らかにしたいと考えている。日本の農業は補助金への依存度が高いという批判や、

TPPに参加することで国際的な競争力をつけるべきだという意見をよく耳にする。私の中でも、日本の酪農は国の政策に翻弄されているというイメージだった。しかし、JAや粗飼料生産組合の方にお話しを伺うと、酪農を楽しみながら、独自に経営を工夫していることがよく理解できた。酪農は繊細で、しかし力強いものなのだ、と感じる。酪農を含め、農業は産業の一つであるから、利益を追求する必要がある。しかし、農産物は命を介した命の循環の根本で、私たちが生きていくために不可欠であり、農業は土地と人間を繋ぐことで、環境保全や、その土地特有の風土や地域の伝統文化を生み出すという多面的な機能も有している。酪農が長い間この役割を果たしてきたからこそ、私は酪農に対して繊細な力強さを感じるのだと思う。利益だけを追求していては農業のこの役割が十分に機能することは難しくなるだろう。一方で、稲作農家は、本来は主食用の米を作りたいが、生産調整により飼料用イネを作付けしているという現状や、良質な粗飼料生産のためには汎用型ロールベーラーなどの高額な機械を購入する必要などの現実がある。生産者の生活と環境保全や伝統文化の継承、それらを総合的に維持、発展させる目的で地域経済のバランスを取るために補助金が必要となるのではないか、と考えるに至った。酪農が環境、農業経営面で持続的に発展していくためには、変化し続ける社会、酪農家、そして地球の要求のバランスをとりながら人類が発展していくことが重要なのではないか。私は、卒業研究を通して現場と接触し、現場を見る目、意見を聞く力を培い、社会、酪農家と環境の接点で、各分野に積極的に謙虚に働き掛け、酪農が持続的に発展していくための最善策を模索していく人間になりたい。